



「パリ通信 13号」

ベストピアは小原靖夫の  
個人誌です。

平成  
二十五年一月  
第十三号

< 2013年 1月 >

古賀 順子

メス・ポンピドゥー・センター

2013年元旦。大晦日から降り始めた雨も午前中に上がり、パリはとても暖かいお正月になりました。初詣にノートルダム大聖堂にお参りしました。ノートルダム大聖堂の礎石が置かれたのは1163年。今年は850周年を迎えます。元旦も世界中からたくさんの方が集まっています。

そして1月6日公現祭（フランス語でエピファニー。東方の三博士が贈物を持って幼子イエスを訪問した日で、フランスではガレット・デ・ロワというお菓子を食べます）。パリから330km離れたメスへ行きました。ルクセンブルグ公国国境まで60km。モゼール川に添った古い歴史を持つ街です。2010年5月メス・ポンピドゥー・センターがオープンしました。現代美術の作品所蔵数ではヨーロッパ有数のパリ・ポンピドゥー・センター分館として、文化を地方に分散する意図で2003年からプロジェクトが進められてきました。このメス・ポンピドゥー・センターを設計したのが日本人建築家坂茂とフランス人ジャン・ド・ガスティン。東西建築家の共同作品は、第2のビルバオ・グッゲンハイム美術館と称される現代的で独創的な建物です。紙管を建築材として取入れ、透明感と光を巧みに建築に応用する坂茂の発想で、1977年パリ・ポンピドゥー・センター設立にちなむ77mのポールを中心に、フレアー・スカートのように波打つ屋根が独創的です。透けて見える木材の構造がとても素晴らしいと思います。大きな作品には最適のスペースで、ピカソがバレエ「パレード」のために描いた舞台カーテン幕（1050cmx1650cm）が展示されていました。1913年ニジンスキーのバレエ「春

の祭典」（音楽ストラビンスキー）にショックを受けた当時20代後半のジャン・コクトーは、人を驚かせるようなバレエを作りたいと考えます。ピカソに舞台と衣装を懇願し、二人でローマに滞在していたセルゲイ・ディアギレフに会いに行きます。エリック・サティが作曲し、1917年5月パリのシャトレ劇場で初演されました。ピカソの「パレード」（布に糊絵具で描いたカーテン幕）は、1920年まではバレエ・リュスの創始者ディアギレフの手元にありましたが、その後アルゼンチンの美術愛好家に購入されるなど、世界中を巡った後、1955年パリ近代美術館に買い取られパリに戻ってきました。バレエの舞台という本来の用途からは切り離されてしまいましたが、第一次大戦後の芸術界が疲弊していなかったことを証明しています。

メスは60kmほど離れたナンシーに比べると、街も小さく、観光客も少ないです。同じロレーヌ地方でも、スタニスラス広場、クリスタル工芸で有名なドーム兄弟、エミール・ガレのアールヌーヴォーで知られるナンシーには多くの観光客が訪れます。メスは、観光地というよりは経済・歴史の街です。元は神聖ローマ帝国領、カロリング王朝の都、中世にはヨーロッパの一大経済都市、1871年晋仏戦争を終結するフランクフルト条約でプロシアの占領下に入ります。建物も厳めしく、ドイツとの関係を色濃く残しています。

聖エチエンヌ（ステファン）大聖堂の美しいステンドグラスを見て、地元の人にメスの名産は何ですかと尋ねると、即答で「ミラベル」。ロレーヌ・ミラベルのジャム、シロップ漬け、リキュールをお土産に買いましたが、確かに美味しいです。パリからTGVで1時間30分。日帰りでもゆっくりと街をみる事ができます。

ピカソのバレエ舞台用カーテン「パレード」



(撮影：古賀 順子)